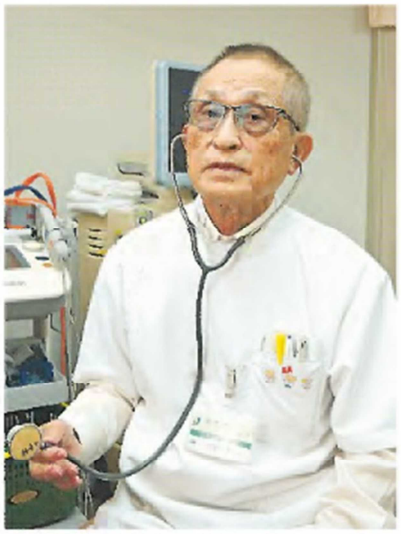
82歳 住民の健康を守る

医療法人敬仁会理事長　伊達の中野さん



「82歳だけど協力できる範囲で（地域医療に）貢献したい」と話す新一さん

エイジレス ふくしま

伊達市保原町でなかのクリニックを運営する医療法人敬仁会理事長の中野新一さん(82)は患者への診察や健診などを通して、地域住民の健康を守り続けている。半世紀以上にわたって患者と向き合い「相手の症状を丁寧に聞き、敬意を持った対応を心がけている」と話す。

両親を楽させたい

幼い頃から医師の父喜一さんと医療現場を支える母静子さんの姿を見てきた。それだけに「（両親に）少しでも楽をさせてあげたい」と医師になることに抵抗はなかった。東北大医学部を卒業後、福島医大第二外科や竹田綜合病院（会津若松市）を経て1979年に喜一さんが経営する中野病院に勤務し、外科医として伊達地域の医療を支え続けた。

新一さんが2010年に伊達医師会長に就任した翌年に東日本大震災が発生。新一さんは病院で患者の診察をしていたところで「大きな揺れに足がすくんだ」と振り返る。急いで入院患者を避難誘導したり、歩行が難しい患者を担架で運んだりした。

「陣頭指揮を執る」

震災後、「自分が現場に行って陣頭指揮を執る」と、他の医療機関の医師と連携して避難所の巡回診療に取り組んだ。伊達、桑折、国見の3地区を訪れ、約4カ月にわたって避難所を巡回。少しでも避難者の心身の調子を整えようと、日本ヨーガ療法学会の知人を呼んで避難者にヨガを紹介し、心のケアにも配慮した。

新一さんは現在、クリニック院長で長男恵一さん(54)をサポートしながら同市の特別養護老人ホームで週1回、利用者を回診しているほか、産業医として年数回、労働者の定期健診なども行う。「人口減少で地域医療も徐々に大変になってきている。自分は82歳だけど、協力できる範囲で貢献したい」。人々の健康のため、新一さんは今日も診察室に立つ。（小幡あみ）

▲　2月1日 福島民友新聞掲載

中野さんはどんな思いから医師になりましたか。

中野さんは震災後どのような活動を行いましたか。

中野さんは今どのような思いで診察室に立っていますか。

「ジュニア窓」にとうこうしよう　福島民友投稿のページ「窓」に送る